

第 10 回「明日の西湘海岸を考える懇談会」 議事要旨

- **開催日時** 令和 8 年 1 月 16 日（金） 13 時 00 分～14 時 30 分
- **開催場所** 小田原合同庁舎 会議室（2 D、2 E）
- **出席委員**（敬省略、代理出席を含む）

【座長】	宇多 高明	日本大学 客員教授
	佐藤 慎司	高知工科大学 システム工学群 教授
	川辺 みどり	東京海洋大学 教授
	柴山 知也	中央大学研究開発機構 機構教授
	川崎 秀一	相模湾水産振興事業団専務理事
	菊田 稔	大磯町区長連絡協議会会長
	関 光裕	二宮町地区長連絡協議会代表
	田邊 邦良	湘南にのみや観光協会 代表理事
	小又 英一郎	二宮海岸に砂浜を戻す会 代表
	柴田 亮	国土交通省国土技術政策総合研究所海岸研究室長
	遠藤 孝枝	小田原市経済部長
	小瀬村 昭	大磯町都市建設部長
	渡邊 恒文	二宮町副町長
	平本 浩一	神奈川県県土整備局河川下水道部防災なぎさ担当課長
	吉岡 敦	神奈川県県西土木事務所小田原土木センター工務担当部長
	池田 六大	神奈川県平塚土木事務所長
	鳥居 隆之	国土交通省関東地方整備局河川部河川管理課河川保全専門官
	佐々木 昇平	国土交通省関東地方整備局京浜河川事務所長

○ **議事**

1. 開会挨拶
2. 議題
 - (1) 国土交通省で進める西湘海岸保全施設整備事業 及び
神奈川県で進める海岸保全対策事業について
 - (2) 意見交換
3. 閉会挨拶

○ **配布資料**

- ・ 第 10 回「明日の西湘海岸を考える懇談会」次第
- ・ 第 10 回「明日の西湘海岸を考える懇談会」出席者名簿
- ・ 配席図
- ・ 「明日の西湘海岸を考える懇談会」規約
- ・ 「明日の西湘海岸を考える懇談会」傍聴規定
- ・ 第 10 回「明日の西湘海岸を考える懇談会」 説明資料 本編
- ・ 第 10 回「明日の西湘海岸を考える懇談会」 説明資料 資料編

【現地視察】

- ・(宇多座長) 突堤裏側に波が回り込むので、突堤後ろは(流されないくらいの)大きな石等をおいて裏側に波が回り込まないように(裏の砂面高と同じレベル)しておくこと。

【懇談会】

開会挨拶

- ・(佐々木所長) 今回で10回目の開催ということで、これまで何をやってきて、どんなことが分かったのかまとめるようご意見をいただき、今回資料をとりまとめました。
ご忌憚のないご意見を頂戴できればと思います。一日でも早く砂浜を回復して、皆様の目に見える形で効果が出ることを目指しております。
- ・(宇多座長) 現地で実施していることはよくわかったと思うので、この場では午前中見た現場について議論できるとよいと思う。時間はタイトだが、できるだけ質問を出していただければと思う。

議題

- ・(宇多座長) p.6 養浜 36万 m³について、区間延長を明示すること。
⇒(京浜河川事務所) 岩盤型潜水突堤1号~6号の間の養浜量なので、全長3kmの区間である。
- ・(柴山教授) 西湘海岸では3つの要素を考える必要があり、それ以外は考える必要はないのではないか。1つ目は、沖向き漂砂により侵食型の海岸が形成され、汀線際の底面は低下して砂が沖に運ばれて溜まること。2つ目は、酒匂川からの流送土砂は少なからずあり、出水があったら溜まること。3つ目は、海底谷があるために、砂が少し沖方向まで行くと岸側に二度と戻らず損失となること。この3つの要素で概ね説明できると理解したがそれでよいか。
- ・(柴山教授) 山で崩れた土砂が川を伝って海に運ばれてくるという連続性が失われたことで海岸侵食が起こったため、神奈川県ではここ10年程、山・川・海の連続性を回復することを進めている。しかし、近1~2年の傾向を聞いていると、酒匂川の委員会では、置砂をしてダムに溜まった砂を自然の力で流下させるのは限界があると言っている。それは置砂の量が少ないために効果が出ていないのであって、大した量を置いていないのにあきらめるのは時期尚早である。
連続性というからには土砂は川に運ばせるのが最も良く、酒匂川からの供給土砂を諦めて養浜土砂にするという言い方はせずに、山・川・海の連続性を実現することを目指すのが、現時点ではダンプでショートカットして養浜を実施するということが分かる表現として、「養浜土砂の海底谷への流失を防ぎ、酒匂川からの供給土砂に加え、効果的な養浜を実施する。」とすると、今までやってきたこととの連続性が崩れないと思った。
⇒(神奈川県) 置砂については、上流の河道が狭く、急激に置砂量を増やせないという実

情があるが、河川のセクションと横連携を取りながら進めていきたい。

- ・(佐藤教授) p.9 について「当初想定と違いがある」とすると、今まで直轄が実施していたことが間違っていると取られてしまう。長期的には正しいことだが、それを待ってられない程時間のかかることなので、養浜も実施しなければならないという意味だと思うので、修正した方が良い。P.23 についても、前半の対策から後半の対策にというのではなく、今の経緯が分かるようにした方が良い。

⇒ (京浜河川) 承知した。

- ・(川辺教授) 最初にどのように仮説を立てて、p.23 に記載のあるようにどういった知見が得られたのかを見せてもらえると、p.10 以降の具体的な部分の内容が理解しやすい。
- ・(宇多座長) p.9 記載されていない判断の材料がある。昔は三本の突堤や西湘 PA の箇所は前浜だったので、酒匂川の砂が飛砂も含め大磯までゆっくりと流れていたが、現在は消波堤や三本の突堤、西湘 PA があり、沿岸方向にスムーズな動きができなくなっている。ただし、連続性の確保を辞めたという資料を見た人が混乱するので、バックボーンを踏まえた丁寧な説明を加える必要がある。
- ・(宇多座長) p.10 No.091~106 では汀線が後退しているが、この区間は神奈川県が飯泉取水堰の土砂を毎年入れている箇所である。土砂を投入しているのに侵食しているので、本当に効果があるのかという面で見てもらった方がよい。

⇒ (吉岡工務部長) p.10 はかなり古い時期からの汀線変化であり、養浜を始めた 2000 年過ぎからはなんとか維持していると判断していて、P.22 の国府津・前川に養浜実施区間では、侵食傾向が出ていないことが養浜の効果と考えている。砂が沖に出ていくこと自体は太古の昔からであるが、現在放置してしまっているのが課題であるという認識である。

⇒ (宇多座長) 近年の養浜効果がわかるように資料を作成したほうが誤解を招かない。

⇒ (平本課長) 資料編 p.15 にある区間 3, 4 の変化から、2010 年以降の養浜の成果が出てきて、安定傾向にあるというデータは整理している。

- ・(柴山教授) 沿岸漂砂の連続性は今後も保たれるのが良いと考えている。一番深刻なのは、海底谷が迫っているという問題であるが、砂礫養浜なので砂の部分は海底谷へ落ちるのは仕方がない。それに対して、礫は沿岸方向にしか動かないので汀線際に残る可能性が高い。酒匂川が運んでくる土砂については、細かい砂と粗い礫が混ざっており、細かい方はあきらめるが、養浜については、細かいものを投入しても海底谷との間の狭い幅の砂浜を通過して沿岸方向に流れる可能性は低いので、礫を中心に投入を行えば、損失したと言われず、養浜は効果的に行われているという評価がされるのではないかと。

⇒ (宇多座長) 私も同様の意見である。京浜河川が説明していたように、掘削した土砂を大きな礫も含めて投入することはどうかという点について、神奈川県の方ではふるい分けを行っているが、その最大粒径は今何 mm なのか。

⇒ (吉岡工務部長) 国府津海岸が 30mm、前川海岸が 50mm である。

⇒ (宇多座長) 上限 100mm 程まで投入することは可能かどうか関係者と議論して、どう

してだめなのかを聞いてみてほしい。網を破るとかシラスが生きている箇所の地盤を覆ってしまう等の意見があると思うが、実際どうか誰もわからないまま、議論だけが回っている可能性があるので、双方にメリットがあるような話し合いをした方がよい。

⇒ (柴山教授) 波の 1 周期以上砂が浮遊したままにならなければ良いので、30mm 程度でも十分効果は発揮できると思う。

⇒ (宇多座長) ふるい分けをするのは二重の経費が掛かっており、京浜河川が実施している方法は合理的であり無駄な税金がかからない。

⇒ (吉岡工務部長) 小田原土木センターでは平成 12 年頃から取水堰の土砂を養浜しているが、最初はふるい分けせずに実施していた。平成 19 年頃から養浜量を増やしたが、ヒラメの良い漁場で刺し網が地面につくまで網を張るところで、そもそも養浜を辞めてほしいという意見がある中で 30mm にしたという経緯がある。一方で、海岸侵食も待たない状況なので、実情や今後の見通しを話せるようにしたうえで漁業者と話し合いをしたい。

⇒ (宇多座長) ヒラメは砂地に生息しており、礫は水深 1~2m 程度、深くても 4m に位置するので、それより沖のヒラメが生息するところにはないのではないか。

⇒ (吉岡工務部長) 国府津海岸では急峻な崖が迫っていて礫も含めて落ちてしまっている。

⇒ (宇多座長) 網の場所を教えてください、その箇所で底質粒径がどのように分布しているか調べたうえで、話し合いをした方がよい。

・ (佐藤教授) 午前中に見た突堤を中心とした土砂の移動抑制は今後も続けるということでしょうか。また、上手側に土砂が来ないことが分かったので、p.23 の大規模な施設を沖合につくるというのは辞めるということでしょうか。さらに、養浜土砂が沖合に落ちるのを防ぐのは具体的な案はまだないが、これから考えるということでしょうか。

⇒ (京浜河川) 沿岸漂砂礫流失抑制施設については、当初想定していたより効果が小さいことがわかってきたので、白紙には戻さないものの、これよりもう少し効果がある施設がないか、検討していきたい。

⇒ (佐藤教授) その旨を記載した方がよい。担当者も変わることがあると思うので、どういう議論があって、どういう方向に進むことになったかは残しておいた方がよい。

⇒ (宇多座長) p.23 の絵は辞めた方がよい。西湘 PA は沖側に突出しており、その沖合は急深になっているので、現在はその間を横向きに砂が動くには難しい。漂砂の移動を西から東向きに記載しているが、東側の海岸で施設を整備して大規模な養浜をするのに対し、その砂が逆流して森戸に落ちないように施設をつくるという話をもう少し記載してみてはどうか。

⇒ (京浜河川) 担当レベルで想定していることだが、1 つは養浜が沿岸方向に流れるのを留める施設があると、東から西向きの波では養浜土砂が留まり、西から東向きの波により養浜材が戻っていくのではないかと考えている。もう 1 つは、30mm、50mm の養浜は続けていくとして、そのバランスを変えていくのが有効ではないかと

考えている。

⇒ (佐藤教授) 複数案が挙がるということなので、今後検討するという事は書いた方がよい。1,000m の施設はもうつukらないということで良いか。

⇒ (佐々木所長) 施設は事業当初の計画に入っているもので、変更するにあたって慎重な議論をしたいというところで、今回は土砂メカニズムの把握できたところから見直しの方向性を図りたかったが、説明が不十分だった。

構造体についても、水深が 10m で露岩域もある中で物理的なものをどうやってつくるのかと技術的な議論をしなければならぬ中で、確たる絵が描きづらかったというところで現在の絵を残してしまっていたので、上手く伝わるように修正する。

⇒ (宇多座長) 原則的には、書いておかないとわからなくなるので、以下 3 点は記載した方がよい。

1 つ目は、酒匂川から出た土砂を有効利用できる仕組みを今後もつくっていくこと。2 つ目は、東側の海岸は直轄事業で土砂を入れ始めているので、その土砂が急速になくなってしまふ状況を放置するのではなく、東側の海岸から流失しないような対策を検討すること。3 つ目は西湘 PA の沖は急峻な地形が迫っているため、特段の配慮が必要であり、モニタリングをすること。この 3 点を忘れずに実現していく方向にあることを共有できるようにした方がよい。

⇒ (柴山教授) 将来的な方向性は連続性の回復なので、それと逆行することはやらない方がよい。養浜は細かい土砂を含んでいるので、沖に流れてしまうので、礫であれば沿岸方向には運ばれるが、岸沖方向には出ていかないので完全な養浜材になると思う。養浜土砂が失われぬように沿岸方向を抑制する構造物をつくるということも言っていたが、極めて抑制的な方法でなければ養浜砂を守るために施設をつくるというのは、長期的な観点からは取らないと思うので、短期的な観点でも辞めた方がよいと思う。

⇒ (宇多座長) 海底谷は非常に急勾配であるため、礫そのものも沖へ流れてしまうので、特に急峻な谷地形の箇所は、粒径の選択を粗めにするというのと同時に、何らかの施設があってもよいと思う。また、小田原は酒匂川からの土砂が大量に供給されてできた土地であり、歴史的に見ると当然なことが起きている。急勾配な海岸線ができていたので、大磯寄りの海岸の保全とは異なるため、もう少し考えて、わからない部分はモニタリングを行い、こういった場で意見をもらいながら少しずつ進めていくのがよい。

• (柴田室長) 西湘海岸は元々極めて厳しい条件にある中で何とか対策を進めており、10 年程進めてきた中で事業の方向性を見直すというのは然るべきである。沖向き漂砂についての分析はしっかりなされているが、沿岸漂砂についてどのように評価しているのかももう少し整理し、データに基づいて事業内容をどのようにするか考えていくしかない。

⇒ (宇多座長) 三浦半島からくる波と伊豆半島からくる波で沿岸漂砂の方向が変わることに加え、水深が大きい海岸で波が減衰せずに入ってくる。単に侵食だけでなく、波による影響があるため、必要なデータを仕分けしながら、実際のデータを見て判断してい

く必要がある。

- ・(菊田会長) p.23 何を書いてあるかよくわからなかったが、先生方から教わって初めて状況がよく分かった。国の直轄事業ということで、粛々と進めていると思っていたが、自然相手ということで一朝一夕にできるものではないということが分かった。地域の間人としては、できるだけ早く綺麗な渚を取り戻して安定的になると良いなと思っていたが、そう上手くはいかないことが分かった。

⇒(宇多座長) 2007年に最初の侵食が起こった時に地元の人からは、大磯の方まで歩いて行けたのでそれを早く戻してほしいという意見が出ており、今も変わっていないはずである。大きな波が来るのは数年に1回なので、観測を行っていても、その年は高波浪が来ないということが多い。

- ・(渡邊副町長) 町民の方にどこまでどうやっているかを説明しなければならないので、わかったこと、わからなかったことは明記した方が次につながると思う。
- ・(田邊会長) 養浜については、ふるい分けをせずに余計なお金をかけず実施してほしい。

閉会挨拶

- ・(平本課長) 有識の方々を始め、様々な方からご意見をいただくことができたと感じています。様々なご意見をしっかり受け止め、国とも連携して海岸の保全に努めてまいります。

以上